

## 子ども教育コースにおける高大連携の期待と展望

### A Vision in Co-operation between High School and University in the Field of Childhood Education Course

酒井 勇 治\* 仲手川 裕 史\*\* 中 澤 純 一\*\*\*

#### 1. はじめに

2011（平成 23）年度、浜松学院中学校・高等学校<sup>1</sup>でマイビジョン教育という新しい教育実践が始まった。マイビジョン教育とは、「生徒の『向上心』を最大限に伸ばし、『達成感』により潜在能力を引き出すことで、『未来』を実現する教育」と謳われている。つまり、高校卒業時に、「生徒一人ひとりが確かな将来像を描くことができること」を目的とした教育である。興誠学園は、大学、短期大学部、高校、中学、幼稚園、子ども園を有し、地域に根ざした総合学園であり、特に4年制である浜松学院大学<sup>2</sup>と浜松学院大学短期大学部（前身は浜松短期大学）は、幼児教育、保育の分野で多くの人材を輩出し、地域の就学前教育・保育に貢献してきた。将来、幼稚園の教員や保育士になりたいと強い希望を持って浜松学院高校に進学してきた生徒も少なくない。

幼稚園の教員や保育士は、家族や親族を除けば、子どもが初めて長く接する大人である。幼稚園の教員や保育士になりたいという希望を持つ生徒の多くは、幼少期、よい先生に出会い、私も恩師のような先生になりたいという憧れを小さいときから持っている。逆に、高校生になってから、幼稚園の教員や保育士になりたいという希望を初めて持ったという生徒は少ない。

そこで、その生徒たちの自己実現をより確かなものにするために、浜松学院高校はマイビジョン教育の一翼を担う子ども教育コースを設立した。全国でも、幼児教育に携わるコースを設立している高校は少なく、そのほとんどが女子高である。静岡県内では、浜松学院高校だけである。

大学や短期大学部と連携し、今後、どのような教育実践ができるのか、また、高大連携によってどのような取り組みが可能か考察する。

---

\* 浜松学院大学（国語科教育法）

\*\* 浜松学院中学校・高等学校（国語）

\*\*\* 浜松学院中学校・高等学校（社会科教育・国際理解教育・生涯学習）

## 2. 子ども教育コースの特色

子ども教育コースは、専門基礎音楽や発達と保育等の、幼稚園の教員や保育士に必要な鍵盤楽器の技能や知識をつける授業を行っている。また、本校の他のコースと同様、系の時間という、多様な個々の進路希望に対応する授業を行っており、幼児・保育系と、初等教育系に分かれる。

幼児・保育系の対象者は、高校卒業後、保育士資格・幼稚園の教諭免許状が取得できる大学・短大への進学をしている生徒で、ピアノの講習や、読み聞かせの方法や折り紙教室等の体験学習、浜松学院大学や浜松学院大学短期大学部の教員を講師として招き、保育科としての心構えや正しい知識や技術を身につけたり、乳幼児とのふれあい体験や、助産師を招いての講義を行ったりしている。なお、2013（平成25）年度から、初等教育系は、特進選抜コース所属の系に移行予定である。

平成2012年度の、子ども教育コースにおける幼児保育系の授業（抜粋）

ピアノの講習は、芸術選択音楽と、専門基礎音楽以外に、系の授業でも行っている。

また、ピアノを習ったことのない生徒のために、金曜日の放課後15:40から、芸術科（音楽）の講師や、子ども教育コースの主任の指導の下、ピアノの補習も行っている。



ふれあいサポートネット「ふわっと」に協力いただき、年3回程度、「赤ちゃんとのふれあい体験」を実施している。この取り組みは、乳幼児とふれあうだけでなく、子育てに励む母親や父親の話を聞くことができるため、子育てについての理解を深めることも目的としている。



切り絵講座や折り紙の講習では、紙の折り方や鋏の使い方を学び、また、色彩感覚を養うことを目的としている。

また、公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会が主催する全国高等学校家庭科保育技術検定に挑戦し、多くの生徒が合格し、自信を持つことができた。



一学年では、浜松学院大学付属幼稚園への訪問活動を行う。幼稚園の「現場」を見ることで、自分の将来像をより明確に描くことを目的としている。また、二学年では、浜松学院大学付属愛野子ども園への一日保育実習を行う。保育部の体験もすることができ、また、園児が登校前から下校後までを見ることができ、ため、幼児教育や保育に対するより深い理解を得ることができた。



生徒たちのモチベーションをあげることと、基礎学力定着のために、以上のような内容を行った。ここで特筆すべきは、大学・短大の講師陣による模擬授業である。本学園は、前述のように総合学園であり、そのため、高等教育 — 中等教育間の連携が取りやすい。今年度は、50 分の授業で、講義が中心であったが、今後は、定期的な高大連携授業も実現可能であろう。そこで、高大連携授業による、高校、大学（含短期大学部）それぞれのメリットや、高大連携授業のあり方について、考察する。

### 3. 高大連携の視点と形～中央教育審議会「接続答申」を中心として～

昨今、高等学校と大学が協力し連携教育を行う高大連携は益々盛んになってきている。浜松学院高等学校と浜松学院大学における取り組みもその一つである。しかし、高大連携の取り組みの形や内容も実に多様である。一方、何をもって高大連携を示すのか。特に文部科学省から決まった形で明示されているわけでもない。また、高大連携に関する先行論文も極めて数少ない。そこで、中央教育審議会の答申を中心に高大連携の経緯と意義について確認する。

高大連携の契機は、中央教育審議会の答申である「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」からである。この答申はいわゆる「接続答申」である。接続答申における検討の視点は4点である。まず、「自ら学び、考える力」と「課題探究能力」の育成を軸にした教育。第二に、後期中等教育段階における多様性と高等教育における多様性との「接続」。第三に、大学と学生のよりよい相互選択を目指して。第四に、主体的な進路選択である。特に接続答申の第4章「初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方」では、高等学校と大学の教育活動における連携を推進するために具体的な方策として、以下の5点が提言されている。

- ①高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を有する高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会の拡大方策
- ②大学がその求める学生像や教育内容等の情報を的確に周知するための方策
- ③高等学校における生徒の能力・適性・意欲・関心等に応じた進路指導や学習指導の充実
- ④入学者の履修歴等の多様化に対応して大学教育への円滑な導入を図る工夫
- ⑤高等学校関係者と大学関係者の相互理解の促進

①から⑤が示す内容を簡潔に述べると、①は、高校生が積極的に各大学の科目等履修生制度を活用し、履修する機会を拡大することや大学教員による公開講座や大学の教員が高等学校を訪問し、専門分野の学問の紹介や講義を行うなどの試み等である。②は、大学側の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）をはじめとした、教育の理念と目標、教育課程の特色、教育指導体制などについての情報公開と明確化、高校生や受験生を対象とした模擬授業や体験入学の拡大等である。③は、大学の教員や企業の協力を得て、高等教育・職業選択・職業生活についての实际的・体験的な情報提供、体験入学や就業体験の機会の拡充。大学入学者に対する教育課程を編成し、各自の進路選択の教育内容に応じた科目を履修するよう適切な履修ガイダンスなどである。④は、大学入学時における、大学教育に円滑に移行するための方法論からなるガイダンスの充実、入学時からの指導教官制（チューター）の導入、オフィス・アワーの設置、インターネットなどを活用し常時履修相談ができる体制づくり等である。⑤は、高等学校関係者と高等教育関係者が双方に情報交換

し理解を深めるための連絡協議会の開催。大学教員が高等学校において学問の紹介や講義を行ったり、高等学校の教員が大学の補習授業に協力する試みなどである。

接続答申から分かるように、高大連携の具体的方策は様々である。故に、浜松学院高校と浜松学院大学における高大連携の取り組みは、方策のごく一部であることが推察される。さらには、次節でも触れるが子ども教育コースにおける高大連携を開始し年数も浅いことから接続答申の具体的方策をもとに今後も様々な創意工夫によって、さらなる展開が期待できる。

#### 4. 高校側から見た高大連携の期待

現在、系の時間は、「総合的な学習の時間」の活動に当てられている。学習指導要領には、「総合的な学習の時間」の学習活動について、「生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動」「自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」と例示されている。本校は、マイビジョン教育の実践に代表されるように、生徒一人ひとりが最適な進路を実現できることを目的としている。

幼稚園の教員や保育士になるためには、高校の教育で完結せず、大学進学し、資格取得の後、採用試験合格という道は避けて通れない。故に、子ども教育コースは、大学や短大と連携してこそ、その真価を発揮するものであると考える。高校としては、高大連携授業を通して、将来の自己実現のためのルートを明確にすることができること、また、数年先の自分の姿をイメージすることができることは、生徒たちにとって大きなメリットである。憧れが希望となり、やがて現実へと変化していくためには、やはり明確なビジョンが必要である。子ども教育コースの取り組みの中で、生徒たち自身が自分の適性や将来像に対し、現実的に考えられるようにもなるだろう。また、生徒たちが大学進学後、その後のサポートや引き継ぎも取りやすくなり、長いスパンで一人の生徒を育て上げることができることも、大きなメリットである。

#### 5. 大学側から見た高大連携の期待

高大連携とは、文部科学省においては「学校外の学修の単位認定」を謳っており、大学における科目等履修生、聴講生としての履修や、公開講座の学習である。

もう一方で、高校と大学の連携を目指し行われる教育活動がそれに当たる。具体的には、オープンキャンパスへの積極的な参加、出張授業の実施、高校の授業カリキュラムの共同研究、高校の授業指導の充実への研究会実施などによる交流などが考えられる。また、高校教員による大学生への基礎教育充実のための補習授業などもその一つとしてある。

本学において、同じ学園であり、なおかつ全国でも希な存在である、高等学校の「子ども教育コース」が設置されたことで、高大連携の機運は高まった。系列校として、本学の現代コミュニケーション学部への入学は一定数あったが、組織的につながり、入学に対し具体的な施策をしてきてはいなかった。現代コミュニケーション学部の中に、子どもコミュニケーション学科が創設され、浜松学院大学短期大学部幼児教育科と併せて、進学先として選択もできるようになった。また浜松学院大学短期大学部はもともと短期大学として長年の歴史があり、地域の幼児教育者の育成には定評があった。従って、四年制大学、短期大学（部）と高校の子ども教育コースの連携は早急に行われなければならない課題であった。さらにその先に、大学としては、この連携事業を進めることで開学以来受け入れてきた学生の質を高め、高大の関係を強める意向がある。これらのことを進めるにあたり、何ができるのか、何をしなければならないのが今問われている課題だ。

先に述べたような高大連携の取り組みは次のようにまとめられる。

- (1) オープンキャンパスへの積極的な参加
- (2) 出張授業の実施
- (3) 高校の授業カリキュラムの共同研究
- (4) 高校の授業指導の充実への研究会実施
- (5) 高校教員による大学生への基礎教育充実のための補修授業

この中で、(1) について浜松学院高校についてまとめると、2011(実質 2010 年)年－9 名 2012(2011 年)年－39 名 2013(2012 年)年－26 名以上になる。本来右肩上がりで増える事が、その成果としてあるのだが、高校側の特殊事情（在籍が本年極端に少ない）ことを考慮に入れると、オープンキャンパスへの参加は、とりあえず順調な推移を示していると言える。

内容的に、本学への興味・関心を受けるものにする必要がある。いかに本学の特徴を高校生に理解してもらうか。今年度から、本学子どもコミュニケーション学科では、その基本的な柱として、DiCoRes プログラム新設し、「対話＝Dialogue」「協同＝Collaboration」「責任＝Responsibility」、つまり「責任を伴う対話と協同を通して時代のニーズ・地域のニーズに対応できる実践力を養う。」ことを目的にしたプログラムである。1 年生から 4 年生に至る課程に、このプログラムを据えた教育を行う。

今年度、特に 2 年生主題演習の科目として学園祭に「ディコレスミュージアム」と銘打ち実践した。これは、目に見える形になり、大きな成果をあげた。これらのことを、やはり、オープンキャンパスでは今後伝えていければと思う。座学だけではなく、実践力をいかに身につけるかを是非高校生に理解してもらい、浜松学院大学への道を選択してほしい。

(2) について、浜松学院大学、子どもコミュニケーション学科の教員が子ども教育コースの生徒に行っているものを紹介する。本学は広く公開講座を出前授業の形で行っている。

石田勝義	①「他人事で済ましていいの？あなた！」	社会福祉系
田嶋善郎	① 「人は様々」 ②「発達心理から見た幼児について」	心理系
大石健次	① 「この子らとともに」 ②「自分らしく輝くために」	教育系
酒井俊郎	① 「動きづくりで脳を活性化！コーディネーショントレーニング体験」	スポーツ学系
茂井万里絵	①「『くまのプーさん』から発達障害の特徴を知ろう！」 ②「人との『違い』を知ろう。違いは個性ですか？」	幼児教育・保育系
高久新吾	①「のだめカンタービレで覚えよう」 ②「NHKの幼児教育で子どもの音楽や表現を知ろう」	幼児教育・保育系
高山静子	①「幼稚園・保育士になるために」 ②「乳幼児のおもちゃ選び～幼児教育における教材や活動の選択基準」	幼児教育・保育系
名倉一美	①「とっても深い絵本の世界ー絵本の魅力と子どもの育ち」 ②「集団ゲームっておもしろい！一遊んで育つ子どもの社会学」	幼児教育・保育系
古橋義彦	①「理科教育を考える」 ②「天球儀を自作し立体正座盤として活用する」	理科教育・教育学
緩利 誠	①「あなたの『強み』応援計画！」 ②「テレビドラマが訴える理想の教師像」	カリキュラム研究
酒井勇治	①「言葉遊び～漢字・語句・文法・おりおりの言葉～」 ②「どこかおかしい表現～日本語のあいまいな表現～」	国語教育

これらの中から、出前講座3コマ、本学の講座への授業参観1コマが今年度行われた。授業参観は、高山先生の講座を60分に凝縮し、浜松学院大学で受講してもらった。浜松学院大学には「子コミ広場」があり、乳幼児（保護者同伴）に開放している。その見学も行った。乳児の考察が短時間ではあったができたのではないかな。今後、このような、大学での受講を計画的に、そして組織的に実施することが望ましい。

出前講座は、①高山、②名倉＋酒井、③名倉で行った。

②に関しては、幼稚園教諭および保育士になるにはという基本のお話を「手遊び」を交えながら話をした。幼稚園教諭および保育士のアウトラインが見えたことであろう。

③について、概要を述べる。授業形態ではあるが、後半で体を動かす必要があるため、広い教室を選んでもらった。結果として音楽室になった。時間90分。

最初に「幼児の遊びは学びであること」のテーマで話をした。ポイントは、「けんかやトラブルを通して、人との関わり合いや人間社会のルールを学ぶこと。」である。真剣に聞いている様子が見られた。

次に、実践として、「集団ゲーム」を行った。①フルーツバスケット②なんでもバスケット③ジャンケン列車④ハンカチ落とし、と 4 種類のゲームを幼児になったように進めた。座学の時の様子とは打ってかわり、楽しそうであった。

最後にまとめの講義をした。

①保育者は一人ひとりを見ていることが大事だ。だれがどんな援助を必要としているかを見極める力。

②そのためには、「考える」ことが大事だ。実践を言葉にして表現できること。

大学生の「実習日誌」を見せる。書く力、つまり高校生から、書く力をつけるように心がける。

③そのためには、「勉強」が大事。ただ、楽しい毎日では駄目。

④結論＝理論化するのがプロ。あなた方は、教育・保育のプロを目指している。

以上のような、出前講座を積み重ねることで、生徒達が意識を高めていくことができればと思う。

(3)、(4) について述べる。高校の授業カリキュラムの共同研究については、まだ端緒についたばかりだ。今後、子ども教育コースのカリキュラム内容の研究や高校の授業指導の充実への研究会実施は、現場の教員が交流を深めることで実現していくしかない。

(5) については、酒井が、高校教員在籍時に、短期大学で作文基礎講座を週 1 回受け持ったり、大学の補習を担当したりということがあった。今後、組織的に深く定義づけられることが望ましい。

## 6. 考察

高大連携は、公立の大学と公立高校の間でも活発化してきている。それを考えれば、同じ学園の中にある、大学、短期大学部と高校が連携するのは必然の理といえる。

現在、高校生の意識の多様化や学力差があり、大学への進学に支障が生まれている。その中で、同じ学園組織である大学側は、高等学校の生徒が大学へスムーズに移行できるようにするための基礎学力の充実や、意識を高める教育が大学とのコラボレーションで実現できないか模索している。

「高大連携」の課題は大きいし多い。実情を考えると、制度はできたが、中身がまだ十分こなされていないと言えるだろう。この現状は、情報不足が原因だ。授業内容においても、高校でどのような内容の教育がされているのか、つかんでいない。少なくとも、

単発で大学教員が講義を行うだけでは、十分とは言えない。やはり、何らかの共同での研究会の実施が次の段階として実現されることが望ましい。

現実には、今いる浜松学院高校子ども教育コースの高校2年生が2014年には大学へ進学してくる。そのためにも、今進めていかななくてはならない課題だ。

## 7. 結び

浜松学院大学におけるアドミッションポリシーである、

- ①子どもの教育や保育に関わる仕事をしたいという希望を語ることができる。
- ②論理的にものごとを考え、自分の考えを述べることができる。
- ③多様な仲間と協力して、イベントなどに進んで参加することができる。
- ④困難に立ち向かう意志を持ち、その克服のために行動することができる。

これは、短大も同様であり、強い志を持ち進学してくる生徒であって欲しい。そのような生徒を高等学校で育てるために、高大連携があると、我々は思う。

今後、大学の講座の履修機会ができるように検討し、さらに高校生に対し、大学が望む学生像について説明をする機会を設けるなど、お互いの距離を縮める活動をする事が求められる。

最後に、特別推薦制度が2013年度よりスタートする。今までの指定校のような制度ではなく、意識的に高校と大学を結ぶ入試制度である。今年度は、その試金石となる年度であるので、制度だけではなく、実質的な部分で少しでも進んでいきたい。

## 【参考文献】

- 1) 中央教育審議会 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』 1999年
- 2) 勝野頼彦 『高大連携とは何かー高校教育から見た現状・課題・展望ー』 学事出版 2004年
- 3) 中條安芸子 『共同運営型の高大連携システムづくりに関する一考察ーキャリア教育の視点から見た高校と大学との連携のあり方ー』 文教大学情報学部『情報研究』第39号 2008年

## 注

- <sup>1</sup> 昭和8年興誠商業として創立、現在79年目を迎える、浜松市内屈指の私立高校。平成23年度より浜松学院中学校・高等学校と校名変更を行った。
- <sup>2</sup> 平成16年開学。現在、現代コミュニケーション学部、地域共創学科・子どもコミュニケーション学科がある。さらに、浜松学院大学短期大学部をもつ。